

私の一冊

社会福祉学科 濱口 晋 先生

鈴木 大介 著 『「脳コワさん」支援ガイド』(シリーズ ケアをひらく)

小鹿図書館 493.73||Su 96

本書では、脳梗塞後に高次脳機能障害となった著者が、医療・保健・福祉等の全ての対人援助職に向け、ご自身の体験を通して、当事者の視点からの適切な支援のあり方について語っている。「脳コワさん」とは、「脳外傷や脳卒中による高次脳機能障害に加え、うつ病・双極性障害・統合失調症などのあらゆる精神疾患、認知症、発達障害等々、病名や受傷経緯などが異なっても、脳に何らかのトラブルを抱えた(脳が壊れた)当事者」のことを指す造語である。(P.5)

外から見ると「ポケットしてる」:僕の脳内は、相手の言葉を聞き取ろうと全身全霊の全力疾走で、がんばってもそれでも聞き取れなくて、本当に苦しい思いをしているというのに・・・(P.23)

30年前、私は新人のST(言語聴覚士)として、大学病院で勤務していました。脳梗塞後、構音障害があり、言語訓練を担当することになった高齢の患者Aさんは、病棟でも訓練室でも、無表情で、何事にも無気力で「やる気のない」女性でした。ある日のAさんはいつもと異なり、頑張っ て発語しようとするなど訓練に対する積極性を感じました。Aさんは「やる気のない患者さん」と思っていた私は、その姿を見て私は驚きました。とても嬉しくなり、「明日も訓練頑張ら ましょう！」と声をかけると、Aさんは一瞬嬉しそうな表情をされました。翌日、Aさんは時間になっても訓練室に来なかったため、病棟に確認すると昨夜お亡くなりなられたとのことでした。しかし、そのAさんが最期に見せた嬉しい表情は、30年経った今でも忘れることはできません。本書を読み、無表情・無気力に見えたAさんにも、実は高次脳機能障害が原因でそのように見えていたのではないかと思うようになりました。

また、著者の鈴木氏は、次のように、支援者に対して切実に訴えている。

「できてますよ」の言葉は、ときに当事者を大きく傷つけることを知ってください。

STさんに話しづらさを切々と訴えても、「すごく上手にお話できています」と毎回言われたことは、僕にとって本当にトラウマです。それは、苦しいと言っていることを完全否定・無視されたのと同じことでした。(P.69-P.70)

医療・保健・福祉の対人援助専門職は、患者・利用者とのコミュニケーション技法として、傾聴や共感が重要であることを学び、日々それを実践するよう努めている。この ST さんも、他の人と比べ、症状が重くない鈴木氏に対して、心理的に支え、励ますつもりで発言したと思われるが、当事者である鈴木氏には共感がまったくなされていないと感じている。

「すごく上手にお話できています」と発言した ST は、かつての私自身ではなかったか？

本書は、真の意味で、利用者への傾聴や共感できているか、私自身改めて問い直すきっかけとなった書籍である。

本書に併せて、著者の闘病記である『脳が壊れた』、『脳は回復する 高次脳機能障害からの脱出』（新潮新書）の著作も読まれることをお勧めします。当事者が感じる高次脳機能障害は、外から見える障害とはかなり異なっており、また、自己の障害認識も一人ひとり異なっていることをもっと知ることができるはずです。

「脳コワ」当事者の見えない苦しみに気づくことができる支援者が増えることを願っています。